

# グリーン・ツーリズムの推進と学びの可能性

—福島県3地域の農家民宿を事例として<sup>1</sup>—

朴 賢 淑\*

高 橋 英 子\*\*

1992年に初めて政策課題として登場したグリーン・ツーリズムは、当初その推進は行政中心に行なわれてきたが、今日、地域経営型グリーン・ツーリズムとして、農村地域の活性化につながるものとして位置づけられている。こうしたグリーン・ツーリズム推進においては、女性や高齢者の役割が期待され、また、女性や高齢者の仕事創出につながるものとして位置づけられている。特に、グリーン・ツーリズム推進下、農家レストランや農家民宿、農産物の加工販売などによる経営の多角化、直売所の増加などが見られ、女性の特性を生かした取り組みは農村地域の活性化にもつながるものとして注目されつつある。

一方、福島県(喜多方市)においても日本全国初めて「グリーン・ツーリズムのまち」宣言(2003年3月)が出されるとともに、2008年には「子ども農山漁村交流プロジェクトモデル地域」に選定され、特に、こうした領域への女性の参加が目立つようになる。子ども農山漁村交流プロジェクトは昨年実施されたばかりであるが、その内容をみると農林漁家での体験活動が取り組まれている。一般の農林漁家への民泊および農林漁家民宿がその受け皿として期待が高まっているなか、農林漁家の民泊及び民宿の拡大は今後大きな課題であると言える。

そこで本稿では、実際農家民宿を行っている福島県の3つの地域(喜多方市、会津坂下町、南相馬市鹿島区)の農家を対象に行った聞き取り調査に基づき、農家民宿の現状を明らかにするとともに、農家民宿拡大への条件は何かを探る。

**キーワード：グリーン・ツーリズム、農家民宿、学びの可能性、福島県**

## 1 はじめに

1992年に初めて政策課題として登場したグリーン・ツーリズム<sup>2</sup>(以下、GT)は、当初その推進は行政中心に行なわれてきたが、今日、地域経営型GTとして、農村地域の活性化に繋がるものとして位置づけられている(宮崎猛、2006)。

GTが持ついくつかの側面、すなわち、都市・農村交流や経済的効果、新しい仕事場の創出などにより、内在的・外在的要因を生かしつつ地域活性化を目指した農村地域づくりが行われている。こ

---

\*教育学研究科 教育研究支援者

\*\*国際女性教育振興会 会員

こうしたGT推進においては、女性や高齢者の役割が期待され、また、女性や高齢者の仕事創出につながるものとして位置づけられている。

さらに、こうした状況と相まって「2001年に向けて—新しい農山漁村の女性」(1992年)が出されることによって、農村女性の活動に光があてられ、シャドウ・ワークとされてきた女性労働が労働の主体として位置づけられつつある。

特に、GT推進下、農家レストランや農家民宿、農産物の加工販売などによる経営の多角化、直売所の増加などが見られ、女性の特性を生かしたそれらの取り組みは農村地域の活性化にも繋がるものとして注目されつつある。さらに、天野寛子(2008)は、農村女性らが単に農業生産に止まらない加工、販売、経営などといった活動領域の拡大を、男女共同参画社会の実現に繋がるものとして位置づけている。

一方、福島県(喜多方市)においても日本全国初めて「グリーン・ツーリズムのまち」宣言(2003年3月)が出されるとともに、2008年には「子ども農山漁村交流プロジェクトモデル地域」(以下、子どもプロジェクト)に選定され、特に、こうした領域への女性の参加が目立つようになる。子どもプロジェクトは昨年実施されたばかりであるが、その内容を見ると農林漁家での体験活動が取り組まれている。一般の農林漁家への民泊および農林漁家民宿がその受け皿として期待が高まっているなか、農林漁家の民泊及び民宿の拡大は今後大きな課題であると言える。

したがって本研究では、実際農家民宿を行っている福島県の3つの地域(喜多方市、会津坂下町、南相馬市鹿島区)の農家を対象に行った聞き取り調査に基づき、農家民宿の現状を明らかにするとともに、農家民宿拡大への条件は何かを探る。

## 2 グリーン・ツーリズムの推進と農家民宿の現状

### 2-1 GT推進状況

1992年出された「GT研究会中間報告」によると、GTは「農山漁村で楽しむゆとりある休暇」「滞在型の余暇活動」として提唱された。その後、農林水産省と関係府省が連携しGT推進に向けての取り組みが具体的に展開・推進されている。

一方、農家民宿は、それより以前の1990年『新しい山村振興対策について』(国土審議会山村振興対策特別委員会)の中で、農業分野の第3次産業として提言され、農業分野の第1次、第2次、第3次産業を組み合わせた総合産業、いわゆる「第6次産業型経済」の構築を目指す方策の1つとして挙げられている。また、1994年の「農山漁村滞在型余暇法(農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律)」(翌年4月施行)では、農山漁村体験民宿の定義が示され、その登録制度が整備された<sup>3</sup>。

その後、1999年の「食料・農業・農村基本法」第36条において「都市農村交流の促進」が謳われ、ここでは、滞在型に限定されない、気軽に農村を楽しむ余暇活動としてのGTが基本法に明記されたと言える。

2002年6月に、国はGTを国民運動によって普及する方針を決定し、2003年には「都市と農山漁

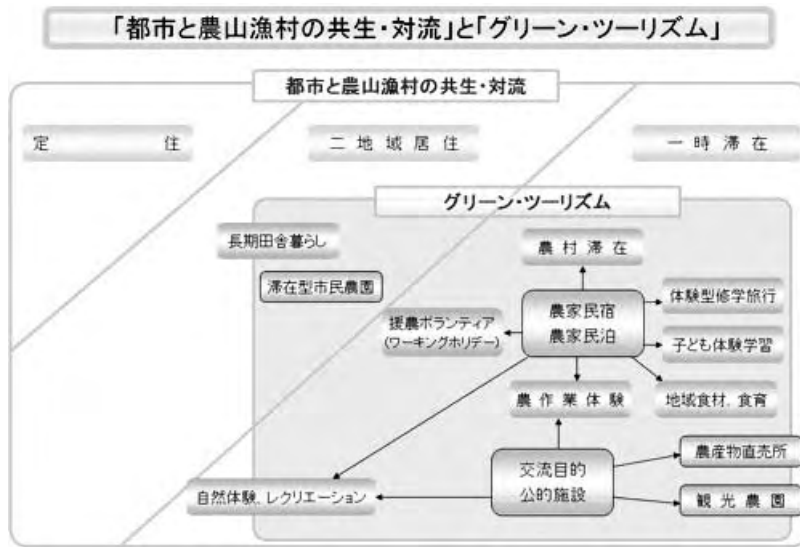


図1 「都市と農産漁村の共生・交流」と「グリーン・ツーリズム」<sup>4</sup>

村の共生・対流推進会議」が設置される。それにより、関係府庁が一体となって規制緩和措置や予算の強化等が実施され、現在、都市と農山漁村の間で「人・もの・情報」が双方向で行き交うライフスタイル(デュアルライフ)の実現を目指す「都市と農山漁村の共生・対流」に向けた積極的な取り組みが図られている<図1参照>。

さらに、農林水産省では、文部科学省、総務省など関係省と連携し、農山漁村が持っている教育力を活かし、子ども達の宿泊体験活動を推進する「子どもプロジェクト」に取り組み、2008年度から実施している。これは、5年後に全国2万3千校の小学校において農山漁村での1週間程度の長期宿泊体験活動の実施を目指すものである(農林水産省、2008)。現在、各都道府県において受入地域の拡大の核となるモデル地域を設置し、そこへの総合的な支援を行い、農山漁村における宿泊体験の受け入れ体制の整備を進めるなど、具体的な取り組みが推進されている。宿泊体験では受け入れ先の確保が課題であり、これに関連して受け入れ先の現状の把握が何より大事であると言える。特に、農家民宿の場合、女性の役割に期待される部分が多いことから、農家女性にとって過重労働となる可能性が否定できない。したがって、近年、こうした現状を踏まえた、すなわち、「女性」の視点を取り入れた施策も積極的に取り組まれるようになってきている。

そこで、福島県では農村地域で男女共同参画社会の実現を推進していくことの重要性を認識の下、「ふくしま農山漁村男女共同参画プラン」(2003年3月)が策定、2005年には同プランの改正が行われる。その中で、農家民宿は「女性の能力を生かした多角的な経営」として、推進すべき指数項目を設定し、その推進が図られている。また、「GTコーディネーター養成研修会」の開催をとおした女性の積極的な参加を促している(表1参照)。これらの取り組みはこれまで農村女性の労働や活動が評価されにくかったことに対して光を当て、女性労働を主体化する一つの試みであると言える。そこ

表1 福島県の農家民宿数とGT・コーディネーター養成講座受講者数

指標項目	単位	18年度実績値	19年度実績値	20年度計画値	目標(期待)値 (平成22年度)
農林漁業体験民宿数	件	36	44	65	75
グリーン・ツーリズムコーディネーター 養成研修会受講生(累計)	人	193	224	223	300
うち女性	人	70	77		150
(重点) 女性の割合	%	36.3	34.4		50

〔「ふくしま農山漁村男女共同参画プラン」(改訂版) 進行管理のための現況調査より抜粋〕

で次の節では福島県の農家民宿の実態を取り上げ、女性労働の現状を見ることにする。

## 2-2 3地域におけるGTの推進の経過と現状

### 2-2-1 調査の概要

本研究では福島県内でGTの推進に力を入れている地域で、喜多方市、会津坂下町、南相馬市鹿島区の3地域を対象とし、質問票に基づいた聞き取り及び郵送調査を行っている。調査期間は、2008年7月～2009年3月までであり、詳しい日程については<表2>のとおりである。次に、3つの地域の概要については<表3>を参照されたい。



図2 調査地の位置

表2 調査日程

日 程	調 査 内 容
平成20年 7月9日	・会津坂下町グリーン・ツーリズム担当職員への聞き取り調査(第1回目) ・会津坂下町の女性起業グループへの聞き取り調査 ・会津坂下町グリーン・ツーリズム・インフォメーションセンター「里のアトリエ坂本分校」の視察
8月7日	・長野県飯田市産業経済部農業課を訪問視察 ・南信州観光公社を訪問視察
8日	・長野県大鹿村「たかやす」を訪問及び農家民宿体験
9日	・長野県飯田市「ふれあい農園おた」を訪問視察 ・同「ごんべえ邑」を訪問視察
10月 21～22日	・喜多方市にてグリーン・ツーリズム コーディネーター養成研修に参加
10月24日	・仙台市にて農家民宿に関する研修会に参加
平成21年1月 12～14日	・喜多方市の農家民宿7軒を聞き取り調査 ・喜多方市グリーン・ツーリズム・サポートセンターへ聞き取り調査 ・喜多方市グリーン・ツーリズム推進室へ聞き取り調査 ・喜多方市教育委員会へ聞き取り調査
1月 28～29日	・南相馬市鹿島区の農家民宿8軒を聞き取り調査 ・旧鹿島町のグリーン・ツーリズム担当職員へ聞き取り調査
2月17日	・喜多方市グリーン・ツーリズム・サポートセンターへ聞き取り(第2回) ・会津坂下町担当職員へ聞き取り調査(第2回)
3月7～10日	・会津坂下町の農家民宿7軒を聞き取り調査
3月12日	・南相馬市鹿島区の農家民宿4軒を聞き取り調査

表3 3地域の概要

	喜多方市	会津坂下町	南相馬市
面 積	554.67km <sup>2</sup>	91.65km <sup>2</sup>	398.5km <sup>2</sup>
人 口	55,456人	18,465人	73,083人
世帯数	18,346世帯	5,687世帯	23,689世帯
農家人口	20,045人	7,660人	20,482人
うち女性	10,349人	3,928人	10,474人
農家世帯数	4,575世帯	1,646世帯	4,398世帯
第1次産業従事者数	4,654人	1,542人	3,123人
基幹的農業従事者数	4,557人	1,601人	3,072人
うち女性	2,374人	769人	1,458人
平成の合併の有無	平成18年1月4日合併 (1市2町2村)	なし	平成18年1月1日合併 (1市2町)

- 面積、人口、世帯数、第1次産業従事者数は「福島県市町村要覧2008」より。なお、総人口、総世帯数は、平成19年3月末住民基本台帳、第1次産業従事者数は「平成17年国勢調査」による。
- 農家人口、農家世帯数、基本的農業従事者数(うち女性者数)は農林水産省HPより。なお、農家数は農林水産省「2005農林業センサス」、就業人口は総務省統計「平成17年国勢調査」による。<http://www.tdb.maff.go.jp/machimura/map2/07/208/economy.html> (2009.3.18)

## 2-2-2 GTの推進背景（喜多方市、会津坂下町、南相馬市鹿島区）

### 調査地1) 喜多方市におけるGTの推進

喜多方市におけるGTの推進の特徴は次のとおりである。

第1に、農業体験や教育旅行に重点を置いた取り組みである。喜多方市では、1998年に大口の教育旅行<sup>5</sup>の相談を受け、同市熊倉地区<sup>6</sup>の農協を窓口、1999年に初めて首都圏中学校の教育旅行を受け入れたことがGTの取り組みのきっかけとなる。

第2に、住民と支援組織、行政が連携・協力してGTを推進していることである。当初、GTの推進は行政主導で始まったが、一方で地域実践団体によるそば打ちや竹細工の体験事業など、民間主導による事業も取り込まれるようになったことから、平成14年度からは地域住民が主体となる一方で行政は後方支援を担う形で事業が展開されることになる。

さらに、「喜多方市GTサポートセンター（以下、サポートセンター）」<sup>7</sup>と喜多方市産業部観光交流課GT推進室（以下、推進室）、地区住民で構成される8つの実践団体<sup>8</sup>が、相互連携・協力しあった取り組みが進んでいる。

第3に、福島県内で最も早く農家民宿に取り組み、地域で話し合いを進めてきたことである。特に農家民宿に関しては、GTの取り組みが活発になった平成15年からで、同年6月には福島県初の「農泊研究会」をスタートさせる。したがって、2005年2月には福島県初の農家民宿が喜多方市で4軒誕生する。さらに、2008年度は、喜多方市が「子ども農山漁村交流プロジェクト」のモデル地域<sup>9</sup>に選

表4 喜多方市のGTの取り組みの内容と経緯

時 期	取り組みの内容・経緯
平成10年頃	・大口の教育旅行の受け入れの相談があり、喜多方市熊倉地区の農協が窓口となって受け入れ準備をする（それ以前も個人々での農業体験は行っていた）
平成11年	・喜多方市で行政主導でグリーン・ツーリズムへの取り組みを開始 ・首都圏の中学校の教育旅行の受け入れを開始
平成14年頃	・熊倉地区に加え、岩月地区、慶徳地区でもGTへの取り組みが開始
平成15年	・市長と担当職員が安心院で農泊の宿泊体験 ・3月に「グリーン・ツーリズムのまち」宣言（全国初） ・4月、市産業部農林課内に「グリーン・ツーリズム推進係」を設置 ・農協の営農指導員を「グリーン・ツーリズム特別指導員」として委嘱 ・6月に「農泊研究会」を設置（福島県初）
平成16年	・新たに民間（農家）より「グリーン・ツーリズム特別指導員」として委嘱
平成17年	・2月に福島県初の農家民宿が誕生（4軒） ・2月に全国グリーン・ツーリズム交流会喜多方大会を開催 ・4月に「喜多方市グリーン・ツーリズムサポートセンター」が開設
平成18年	・1市2町2村が合併、新市として新たに「グリーン・ツーリズムのまち宣言」
平成20年	・農泊受け入れ農家による「農泊ネットワーク」が結成 ・市グリーン・ツーリズム担当部署が農林課から観光交流課「グリーン・ツーリズム推進室」となる（農林課→観光交流課） ・「子ども農山漁村交流プロジェクトモデル地域」に選定（福島県では喜多方市と南会津町の2カ所が選定。9月に県内の小学5、6年生を受入れた） ・10月：県「グリーン・ツーリズム・コーディネーター養成講座」を実施
平成21年	・2月：東北ツーリズム大学福島キャンパス喜多方校を実施 ・3月現在、「サポートセンター」のNPO法人化を推進中

定されるなど、2009年現在、14軒の農家民宿が存在する。

調査地2) 会津坂下町における GT の推進

会津坂下町は、喜多方市に続いて GT 推進への取り組みが早い地域である。そこで会津坂下町における GT 推進の特徴は以下のとおりである。

第1に、行政の一貫した GT への関わりである。会津坂下町では2001年から GT の取り組みが始まる。当時、策定された「第4次会津坂下町振興計画」の第4章「賑わいのあるまちづくり」の中で交流人口を増やしていくことが掲げられ、施策として取り組むようになったのがきっかけである。

表5 会津坂下町の GT の取り組みの内容と経緯

年 度	取り組みの内容と経緯
平成13年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第四次会津坂下町振興計画においてグリーン・ツーリズムが重点施策として位置付けられる。</li> <li>・「会津坂下町 GT 促進委員会の設立(平成14年2月28日)」</li> </ul>
平成14年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知恵を活かす地域づくり・人づくり推進事業実施：ふるさと応援隊の受け入れ</li> <li>・新分野進出等アドバイザー派遣事業：東洋大学教授青木辰司氏</li> <li>[支援・連携]</li> <li>・東洋大学社会学部青木ゼミ</li> <li>・(助都市農山漁村交流活性化機構(まちむら交流機構))</li> <li>・(助地域総合整備財団(ふるさと財団))</li> </ul>
平成15年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農林水産省「消費者の部屋」特別展示</li> <li>・グリーン・ツーリズムパンフレット「たまたま箱」の作成</li> <li>[人材育成事業]</li> <li>・第1回全国グリーン・ツーリズムネットワーク熊本大会参加</li> <li>・全国グリーン・ツーリズム研究大会 in 能登に参加 (毎年人材育成事業を実施し、様々な大会や研修へ参加している)</li> <li>[支援・連携]</li> <li>・岩手県遠野市 NPO 法人遠野山・里・暮らしネットワーク認証記念シンポジウム・遠野宣言</li> </ul>
平成16年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グリーン・ツーリズム拠点施設として農村環境改善センターの設置</li> <li>・グリーン・ツーリズムホームページ開設「緑・旅・遊」</li> <li>[支援・連携]</li> <li>・NPO 法人日本グリーン・ツーリズムネットワークセンター認証記念シンポジウム</li> <li>・宮城県鳴子町第2回グリーン・ツーリズムネットワークみやぎ鳴子大会 オプショナルツアー受け入れ</li> </ul>
平成17年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福島県地域づくりサポート事業として(以下、事業内容は抜粋)</li> <li>会津坂下町グリーン・ツーリズム推進計画策定</li> <li>ワーキングホリデー受け入れ体制の整備</li> <li>東北ツーリズム大学福島キャンパス会津坂下校実施</li> <li>「テーマ：地域資源を活かし、地域そして次世代へ繋ぐ」他</li> <li>・旅館業営業許可(簡易宿所)取得 9軒(農泊延べ人数133人)</li> <li>・グリーン・ツーリズム推進フォーラムの開催</li> </ul>
平成18年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東北ツーリズム大学福島キャンパス会津坂下校実施「テーマ：旅は続く」</li> <li>・ワーキングホリデーの受け入れ</li> <li>・旅館業営業許可(簡易宿所)取得 1軒(累計10軒、農泊延べ人数262人)</li> <li>・飲食点営業許可取得 6軒</li> </ul>
平成19年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グリーン・ツーリズムインフォメーションセンター設置 →里山のアトリエ坂本分校</li> <li>・東北ツーリズム大学福島キャンパス会津坂下校「テーマ：人と出会う」</li> </ul>
平成20年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福島県の「農家民宿組織化モデル支援事業(連携支援型)」モデル地区に選定</li> <li>・東北ツーリズム大学福島キャンパス会津坂下校</li> <li>「テーマ：“子ども農山漁村交流プロジェクト”を考える」</li> </ul>

(会津坂下町配布資料より抜粋、および聞き取り調査より作成)

そこでは「交流」をまちづくりのキーワードに掲げ、その起爆剤として「GT やエコ・ツーリズム」を重点施策として位置付け、それに基づき GT の取り組みが進められる。また、同じ行政担当職員が GT の取り組みの開始当初から関わっており、行政は一貫したスタンスで市民との協働連携で GT を推進している。

第2に、2002年2月、住民が主体となって「会津坂下町 GT 促進委員会（以下、促進委員会）」（任意団体）を設立し、事務局を会津坂下町役場産業部農林振興班が担当し、住民と行政が協力し合いながら GT の推進に取り組んでいる。

第3に、農家民宿の取組みに関しての担当職員の話によれば、会津坂下町では、大規模農家が農家民宿を行なっていることが多く、農家民宿は受け入れ農家にとって「農業生産の香辛料、スパイス」であり、「楽しみ」をもたらす。つまり、受け入れ農家は、農家民宿で人を泊めたり、人と関わることの目的を現金収入ではなく「楽しみ」として捉えている傾向にある。農家民宿の利用者は大人がほとんどであり、農業体験ではなく、何もしないゆったりとした田舎暮らしを楽しむというコンセプトの下、GT を推進している。2005年に町内の農家9軒が農家民宿の許可を取得し、2008年現在は11軒が存在している。

### 調査地3) 南相馬市鹿島区における GT の推進<sup>10</sup>

南相馬市鹿島区における GT の推進の特徴をみると、以下のことが言える。

第1に、行政主導の勉強会や研究会への取り組みである。合併前の旧鹿島町では、地域振興施策のひとつとして GT が検討され、「地域振興グループ」<sup>11</sup>が担当部署となり、旧鹿島町では、行政主導で勉強会や研究会の実施が大きな影響を及ぼす。（当時住民30人程度が参加）

その後、住民主導の研究会が立ち上げられ2004年 O 氏を会長に据え、女性9人をメンバーに「都市農村交流研究会（以下、「交流研究会」）」が結成されるなど、GT の理解を深めるための学習会が積極的に取り組まれるようになる。

その結果、2005年12月に10軒揃って農家民宿の許可を取得することになるが、当時、農家民宿の

表6 南相馬市鹿島区における GT の推進の経緯

年度	取り組みの内容と経緯
平成13年頃	・旧鹿島町で、地域振興として GT への取り組みが検討 ・コンサルタントを交えての勉強会や研究会を開催
平成16年	・「都市農村交流研究会」が立ち上がる ・体験メニューパンフレットの作成
平成17年	・先進地研修として宮城県加美町、青森県を訪問し、実際に農家民宿を体験する ・幕張メッセでの物産展イベントに参加、ハラコ飯や物産の販売を行なう ・仙台市での物産展イベントに参加 ・郡山との交流（現在も年1回継続）で「鮭まるごと体験」を実施 ・12月に農家民宿10軒が誕生
平成18年	・1月に1市2町が合併し、「南相馬市」が誕生 ・モニターツアーを実施
平成20年	・東京都杉並区から「田舎暮らし体験」の受け入れを実施
平成21年	・3月に「子ども夢学校南相馬市協議会」設立



許可の取得において、農家民宿の申請手続きは担当職員が行ったことである。

第2に、鹿島区は沿海に接していることからブルー・ツーリズムを楽しめる地域でもある。

以上、3つの地域におけるGT取り組みの流れとその特徴をみてきた。当時、それぞれの地域が置かれている状況は違っているものの、共通点がみられる。3つの地域のGT推進過程から取り上げてみると、①住民が事業に取り組んだきっかけは行政の働きかけが大きい、②勉強会及び研修会をとおした学び、③住民自らのGT関連組織への働きかけ、④その地域が持っている特徴<sup>12</sup>を生かした取り組みが出されるなど、がGT推進において大きな影響を及ぼしていることがよくわかる<表7参照>。

表7 3地域のGT推進の特徴

地域名	名称	事務局	構成員	活動内容	課題・構想
喜多方市	・喜多方市GTサポートセンター ・喜多方市GT推進室(行政担当窓口)	・事務局長1名、事務2名 ・(市職員5名)	・会員161名(構成実践団体8団体)	・1999年から教育旅行の受け入れ開始 ・農業体験を積極的に受け入れ ・「子供プロジェクト」のモデル地区に選定。 ・GTコーディネーター研修実施 ・東北ツーリズム大学喜多方キャンパスの実施	・大人数の教育旅行の受け入れを可能にするために、GT推進室と連携し農家民宿数を増やすことが課題 ・サポートセンターの自立的運営が目標。そのため、NPO法人設立に向けて準備中(2009年3月現在) ・「安心、安全」を掲げ、保険の統一や農泊ネットワークにおける研修の実施
会津坂下町	・会津坂下町GT促進委員会 ・町産業課農林振興班GT担当(行政窓口)	・町産業課農林振興班が事務局	・会員39名	・県の農家民宿組織化モデル支援事業の「連携支援型」モデル地区の選定を受ける ・東北ツーリズム大学坂下町キャンパスを実施	・JR只見線沿線で広域連携 ・2009年度は、喜多方市と連携して教育旅行を受入れる予定 ・着地型旅行のプログラム開発 ・GTは農村振興の「スパイス」
南相馬市鹿島地区	・都市農村交流研究会 ・相馬市観光交流課(行政担当窓口)	・会長宅	・10名(会長以外、全員女性会員)	・首都圏でのイベントに参加し、物品販売を実施 ・南相馬市と連携し、首都圏住民の「田舎暮らし体験」の受け入れ ・漁業協働組合と連携し、「鮭まるごと体験」の実施	・南相馬市や他団体と連携し、「子どもプロジェクト」の受け入れを視野に協議会の立ち上げ(2009年3月13日設立) ・沿岸沿いの地域性を生かして、漁業協同組合との連携やブルー・ツーリズムへの取り組み

### 3 実態調査からみる農家民宿の現状

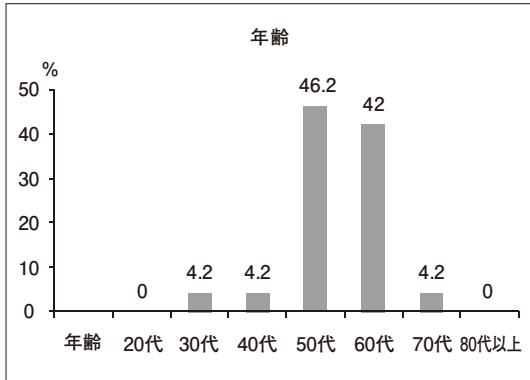
・調査の対象：喜多方市(7人)、会津坂下町(7人)、南相馬市鹿島区(10人：2人はアンケートを郵送)の農家民宿を担う農村女性。

#### 3-1 3つの地域における農家民宿の現状

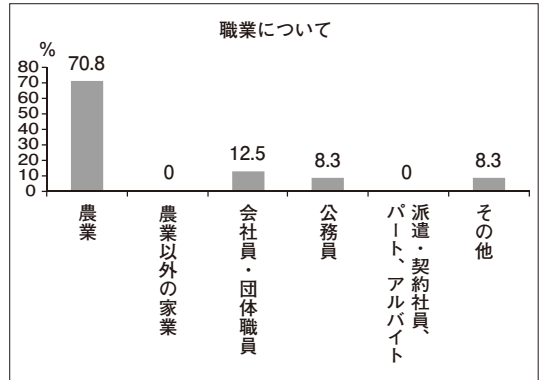
##### 1) 属性及び職業について

農家民宿は主に50代、60代女性が9割を占めており、さらに、農業従事者が7割であり、勤務しながら農家民宿を担っている女性が2割を占めている。家族構成においては夫婦のみで生活しているのが4人(Oさん、Uさん、Wさん、Xさん)で、2世帯(本人+子、親+本人)構成が7人(Aさん、

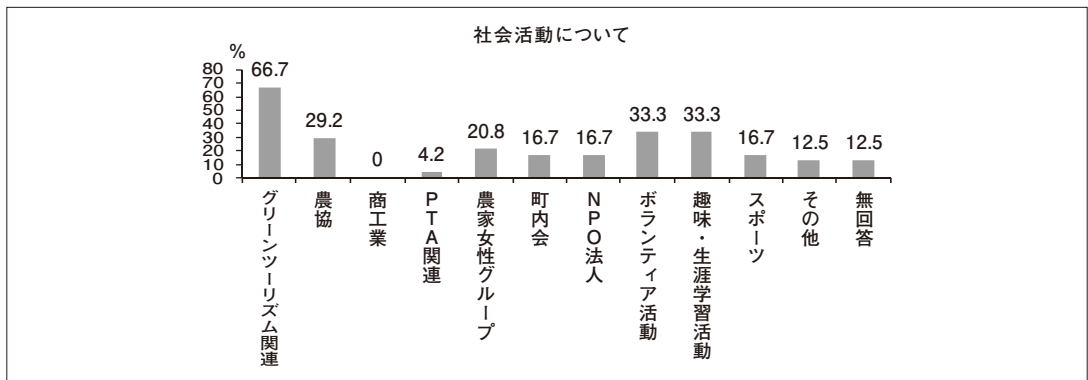




図表1 年齢について



図表2 職業について



図表3 社会活動について

Cさん、Fさん、Gさん、Iさん、Qさん、Rさん)で、3世帯及び4世帯家族からなるのが13人である。そのうち、介護(可能性も含む)を抱えている人が9人(Dさん、Jさん、Lさん、Mさん、Nさん、Qさん、Rさん、Tさん、Vさん)であり、ここでは本人が高齢でありながら高齢の親の介護に当たる、つまり老老介護の可能性が予測できる。

次に農家民宿以外の活動については、<表8>の⑥で示したように、調査の対象になった二人(Lさん、Wさん)を除いた全ての人が農家民泊意外にも加工販売、直売所、農業体験、ワーキングホリデー、農家レストランなどに1か所から多くは4か所まで関わっている。したがって、農家女性の多忙さがうかがえる。

2) GT 関連の活動へ7割弱(16人)の女性が参加している。(複数答可)

<図表3>で示したように、GT 関連の活動への参加が最も多く(6割強)、鹿島区では会長以外の会員は全員女性であり、喜多方市では農業体験を担う女性が多いことから、GT の団体への加入が多く見られる。一方、会津坂下町では、夫がGT 関連の活動に参加している場合が多く、7人のうち2人がGT 促進委員会に参加している。続いて、ボランティア活動及び趣味・生涯学習活動においては、それぞれ3割を占めており、農家女性グループ活動では2割を占めるなど、積極的に活動に関わっていることがわかる。

### 3) 農家民宿に興味を持ったきっかけと実際に農家民宿を始めたきっかけ

「農家民宿に興味を持ったきっかけ」について聞いたところ、「行政からの勧め」(58.3%)にならんで「人との交流」(54.2%)を挙げている人が最も多く、「地域の活性化のため」が25.0%、「自分のやりがいのため」(20.8%)である。さらに、その他が33.3%を占めており、詳しい内容は<表9>を参照されたい。

図表4 農家民宿に興味を持ったきっかけ

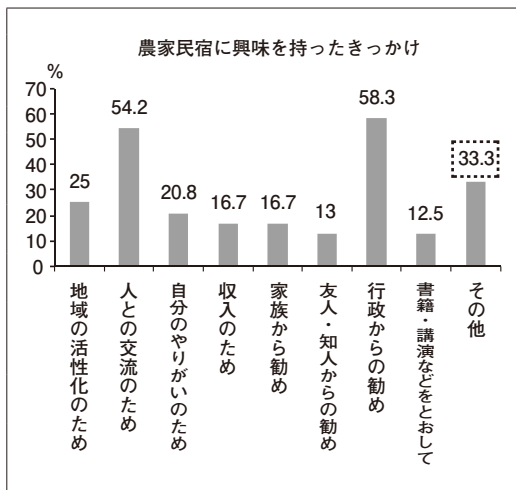


表9 「その他」理由

その他の理由
・隣の地区のイベントの手伝いに行って、ぜひ自分の地区でもグリーンツーリズムをやりたいと思った。農業の大切さ、食の大切さをつたえたいと思ったから。(Bさん)
・客商売が好きで、いつか民宿をやってみようと思っていた(Dさん)
・10年ほど前に「農村景観講座」などを受講して関心を持っていた。グリーンツーリズムは金儲けではなく、「人儲け」だと思う。(Fさん)
・東北ツーリズム大学で実際に農家民宿に宿泊して関心を持った。(Gさん)
・以前から人の出入りの多い家だったので、自然に。特に「関心を持った」と意識したことはない(Iさん)
・以前、ベトナムの人をホームステイさせたことがあり、楽しかった。言葉の通じる日本人ならもっと楽しいのではないかと思った。(Qさん)
・グリーンツーリズムの担当職員として勤務しており、職務がら(Wさん)
・やりたくて始めたわけではない。町の活性化のために行政がやり始めて、何がなんだか分からないうちにグリーンツーリズム関係の研究会のメンバーになった。(Pさん)

図表5 農家民宿を始めたきっかけ

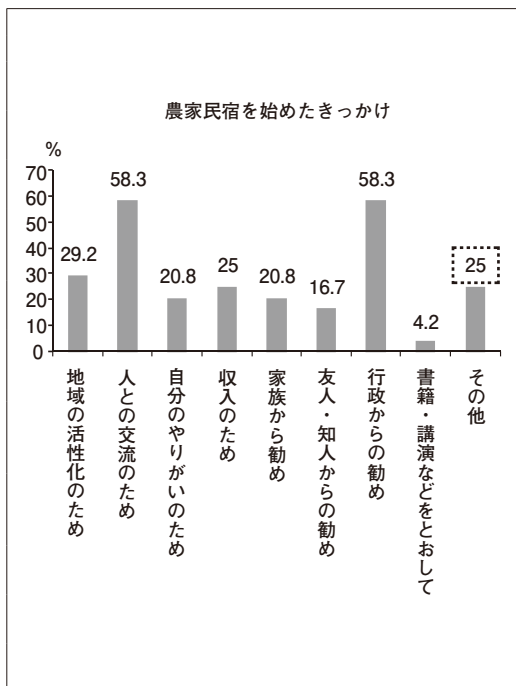


表10 「その他」理由

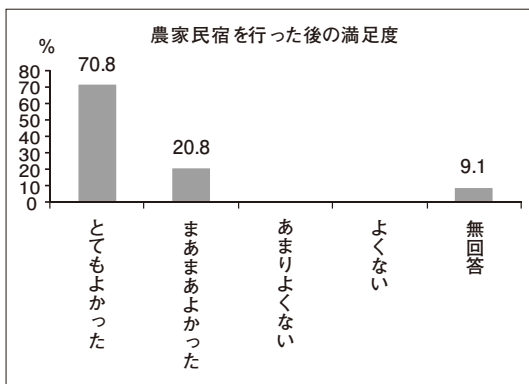
農家民宿を始めた理由
・農業や食の大切さを伝えたい。(Bさん)
・農産物の販売にも繋がればという思いで始めた。しかし今は子どもの健全育成のため。やっていく中で変わってきた。(Dさん)
・自分にとっては、夫からの勧めだが、夫にとっては行政からの勧めでもあったようだ。(Eさん)
・団塊の世代や田舎の人が実家へ帰るように農家民宿に来てホッとしてほしい。地方にとってはマンネリ化の打開にもなる。(Fさん)
・家を別に新築したため、農家民宿で使っている家を利用したかった。農家民宿だけでなく、地域のコミュニティの場として、お年寄りや子どもが集える場所としても使ってもらえるようになればと考えている。(Gさん)
・個人的にすでに人を泊めたりしていたので、自然に。みんなが許可を取るといっているので、一緒に申請した。(Iさん)
・農業委員の研修で安心院で農家民宿を体験した。いろいろ話しながら帰り際にはずっといたような気持ちになって、気持ちがホッとした。心の交流。自分もぜひやりたいと思った。(Kさん)
・家を新築したので部屋もあり、設備も整っていた。あまりやりたいと思ったことはないが、行政からの勧めもあり、農業の忙しくない時期であれば、ということから開始した。(Lさん)
・町が活性化のためにグリーンツーリズムをやり始めて何がなんだか分からないうちに研究会に入れられた。モニターで実際に泊めてみたらよかった。(Pさん)
・研究会で農家民宿に宿泊してみても「できるかな」と思った。行政のサポートがあったことも大きい。(Rさん)
・夫・息子がグリーンツーリズム関連グループに所属していたので。自分からやりたいと思ったわけではない。(Jさん、Hさん、Mさん、Oさん)
・「やらなくちゃいけない、もうやるしかない」という感じだった。自分からやりたいと思ったわけではない。(Sさん)

さらに、実際に「農家民宿を始めたきっかけ」については、「行政からの勧め」と「人との交流のため」がそれぞれ58.3%（14人）を占め、「地域の活性化のため」が29.2%（7人）、「収入のため」が25%（6人）、「自分のやりがいのため」と「家族からの勧め」がそれぞれ20.8%（5人）である。さらに、その他が25%であり、詳しい内容については〈表10〉を参照されたい。

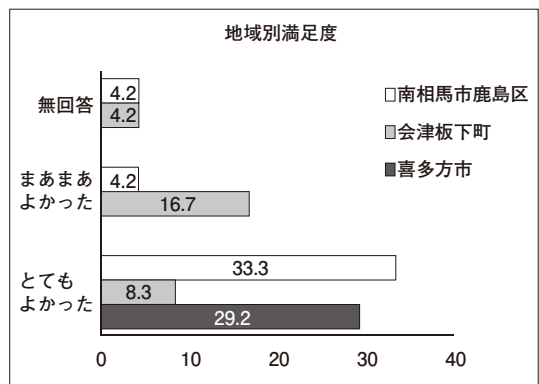
「農家民宿に興味を持ったきっかけ」と「農家民宿を始めたきっかけ」を比べてみると、実際農家民宿を始めるにあたって、それぞれの項目の比率が上がっているなか、「書籍・講演などで知って」の項目の比率は下がっている。書籍や講演会等は、農家民宿の情報収集のためには有効であるが、実際に農家民宿を開始するにあたっては、手続き等の支援・相談も含めた行政からの働きかけや家族の同意・協力、すでに農家民宿を始めている人からの経験談を交えての勧めなど、第三者からのより積極的な働きかけによる影響が大きいと言える。とりわけ、行政からの支援の影響は大きい。今回の調査対象となった3地域では、GT担当職員が申請書類の作成を行い、さらに旧鹿島町では申請費用を補助金を活用している。行政の支援の充実が農家民宿を始める際に大きな後押しになっている。

#### 4) 「農家民宿」と「満足度」について

農家民宿を始めて「良かった」と肯定的に捉える人が9割を占めている（「とてもよかった（17人）」＋「まあまあよかった（5人）」）。さらに、地域別にみると喜多方市で最も満足度が高くアンケートに答えた全員が「とてもよかった」と答えている。



図表6 農家民宿を行なった感想について



図表7 地域別満足度

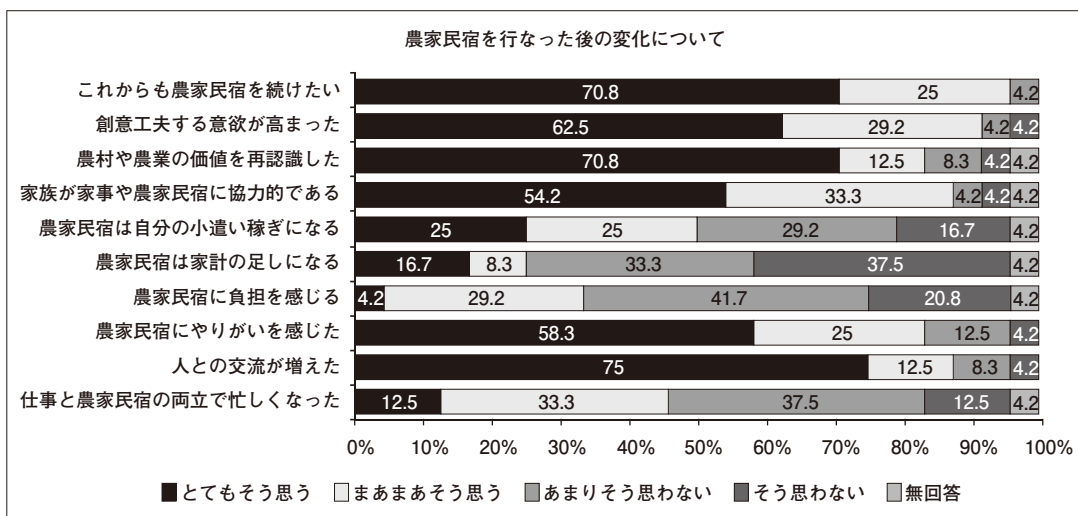
#### 5) 農家民宿を始めてからの変化について

「これからも農家民宿を続けたい」と思っている人が最も多く、続いて「創意工夫する意欲が高まった」が9割を超えている（とてもそう思う＋まあまあそう思う）。

一方、「仕事と農泊の両立で忙しく感じる」が5割弱で、さらに、「農泊に負担を感じる」割合も3割を超えている。

##### ① 農家民宿は「人との交流」の場（KさんとUさんのケース）

Kさんは、自分が農家民宿を始める前に農業委員の研修において、農家民宿の先進的取り組みで



図表8 農家民宿を行なった後の変化について

有名な大分県の安心院町（現在は宇佐市）を訪れ、農家民宿を体験する。さらに、Kさんは、自分が経験したような心の交流を都会の人に提供したいという理由から家族に反対されながらも農家民宿を開始したケースである。

「民泊したのは一晩だったんですけど（略）、帰り際に何日もいたような感じになって・・・、これってなんなのって、なんでこんなに（気持ち）傾くのかなって。やはり心なんですよ。ね。（略）都会の人ってこんな心を求めているんだなって思って・・・。」

「（来てくれたお客様は）故郷が皆ない人でした。感動したみたいです。お客様のほうから親戚になったって言うてくれるんだもの。（略）気持ちだよ、これがGTなのかなって・・・。（Kさん）」

当初農家民宿に反対であった夫も現在では、人生の先輩として若者と語り明かすなど、Kさんと共に訪れる方との心の交流を楽しんでいる。

また、IターンしたUさんは、都会からの視点で眺めた地方の良さを次のように語っている。

「都会の人はそういうの（お金に換算できない交流）を求めているんじゃないかしら。全てお金で解決できるんだったら、都会のほうがいいですよ。でもお金じゃ買えないものもそこにはあるはずですから。（略）お金には換えられないもの、人のあたたかさ、失ってはいけない田舎のよさ、そういうのが一番大切なんじゃないかなと思うんですよ。（Uさん）」

Kさん、Uさんとも訪れる側の視点から農家民宿の良さを「人との交流」として捉え、その交流の根底に「心の交流」が欠かせないことを指摘している。

また、最初彼女らが農家民宿に関わるようになったきっかけは行政によるものであったが、研修会や実際民宿を行うことによって人と触れ合うことになり、漠然でありながら自ら GT への定義やその良さに気づくことになる。

## ② 農業、景観、食を通じた農村価値の再認識

「農村や農業の価値の再認識」について、8割を超える女性が肯定的(「とてもそう思う」+「まあまあそう思う」)に捉えている。さらに、聞き取り調査からは、次の意見を聞くことができた。

「『空気が美味しいですね』って。自分ではあっけにとられたの。何言ってるんだべって最初思った。言われて、改めて、そういうところに住んでいる自分を再発見したの。自分では何気なく過してることでも、来る人は感激するのな(Sさん)」

「別に地域がどうのこうのっていうことは、(農家民宿を)始める前にはあまり考えたことなかったですね。地域については、むしろ農泊をやった後。遠くから来た方から「ここはいいところですね」って言われると、地域を再発見する、もっと良くしなければっていう思いが出てくる(MHさん)」

Sさんは、それまで身近にありすぎて気付かなかった自然の素晴らしさや地域の良さを、訪れたお客さんの反応や語りによって気付かされ、改めて自分の地域を見直すきっかけになっている。また、MHさん(Mさんの夫)は、農家民宿を受け入れる中で、外からの視点で自分たちの地域の良さを再認識することができ、さらに良くしていこうという「プラス思考」に繋がっていると言える。

また、農家民宿はそれを行なっている農家だけでなく、彼女たちが住んでいる近所の人にも影響を及ぼしていることがIさんの話からわかる。

「(地域の方々にもGTを)受け入れられるようになって、(近所の方から)『ここ、そんなにいいところなんだな。きれいなスカートはいて(よそから来た人が)散策してるもん』なんて言われる(略)。家で泊まった人が散歩していると、(お客さんが地域の方から)『家の野菜持ってがっせ』なんて言われて・・・(Iさん)」

以上のように、農家民宿を受け入れることは、受け入れ農家はもちろん、地域の人達においても、第三者の視点を通じて、普段何気なく暮らしている農村の景観の美しさや自然の豊かさなどの価値を再認識することにつながっていることがわかる。また、「食」を通じて、食べてくれる人との交流や地域の食文化の価値を再認識することに繋がるものとして位置づけられている。Eさん、Hさん、Qさん、Rさん、Sさんからは、自宅で取れた食材を使った料理、普段何気なく食べている料理や田舎料理、保存食などをお客様が目の前で「美味しい」と言いながら食べてもらえることに大きな喜びを感じている。

また、Bさん、Fさんは、自分で作った作物だからこそ、食の大切さや食に込められた物語(どう

やって作ったか、どこで育ったかなど)を食事する人達に伝える事の大事さに気づいていく。こうしたプロセスを通し、お客さんと一緒に食べることを通じた「交流」や「作り手の思いを伝えること」が何より大事であることに気づく。

さらに、Bさんの話からは「農村問題」を発信していく大切さにも気づいていくことがBさんの語りから言える。

「最初から農村や農業の価値を評価している。こんなに国民の命を守っているはずなのに、農業している者が、農業の大切さ叫ばなかったら誰が伝えるんだって。(Bさん)」

以上の結果から、農家民宿を受け入れることは、お客様の反応を通じて農業や景観、食に対する第三者の視点に触れることになり、それによって農村に暮らす人自身も農村の価値を再認識するきっかけに繋がっていることがわかる。さらに、こうした気づきを地域住民と「共有」すること、また農村住民自らが積極的に農村問題を発信していくことの大事さに気づいていく過程として位置づけている。

### ③ 農家民宿の受け入れにより「自己啓発」へ繋がる。

農家民宿をすることによって「創意工夫をする意欲が高まった」と思う人が、9割(「とてもそう思う」+「まあまあそう思う」)を占めている。さらに、これに関連して、AHさん(Aさんの夫)とDさんの話を取り上げてみる。〈図表8参照〉

「喜んでもらえるって頑張る勇気っていうか。じゃ、次はこうやってみようかって(AHさん)」  
「意識が高まってきている。慣れてくるとそういう風になってくる。最初は何やっていいかわからないでやるわけだけど、やっているうちに(創意工夫の意欲が)上がってくると思う、誰でも(Dさん)」

さらに、IさんとIHさん(Iさんの夫)、Fさんから次のような意見も聞くことができた。

「お客さんが喜ぶばかりでなくて、自分たちの生活向上に繋がる(Iさん)」  
「居ながらにして、田舎の人達の意識が変わる(IHさん)」  
「農泊は平凡な生活のなかで都会の風が入ればいい。ここにいながら都会のことを感じてもいいんじゃない、自分が行くんじゃなくて。都会の人が来ることによって自分の感性も磨かれる。(Fさん)」

AHさん(Aさんの夫)とDさんは、農家民宿と並行して農業体験も行なっている。受け入れていく過程で、訪れたお客さんの喜んだ反応を見ることによって、受け入れ農家側にも「もっといろ



いろな農業体験をさせてあげたい」、「昔の話しを教え伝えていきたい」、「語り部を呼んでその話を子どもたちに聞かせたい」などといった創意工夫や意識の変化、また今の生活をさらに改善してこうとする意識が生じることが伺える。

以上のように、農家民宿は、外から人が訪れることによって、農村に暮らす住民がそこに居ながらにして外の風を感じることによって、意識変化や自己啓発につながる効果があると言える。

④ 世代間交流は「生き甲斐」や「やりがい」を生み出す。

農業体験に指導者として参加経験を持つ人の多くが、農家民宿を行った経験のうち、青少年に接する機会を持つことにより、「青少年育成」に貢献できることへの「やりがい」を感じていることがわかる。喜多方市では全員(7人)が、南相馬市ではSさんがそれに該当する。Cさん、Dさん、Eさん、Fさん、Gさんは、子どもたちとの交流を楽しんでおり、交流から元気ももらっている。さらに、Aさん夫妻、Bさん、Sさんの指摘からは、農業や昔の生活を次世代に伝えていくことに重きを置いている。

「昔のことを子どもに伝えていきたい。昔の教えが受け継がれるかな(AHさん)」

「イベントは、人集めからすごいエネルギーがいる(必要)、効果は一過性。農泊のほうがそれはやりがいありますよ。(農泊することによって、子どもたちの中に)何かは残ってほしい、気づいてほしい(Bさん)」

「保存食、伝えたいな～。絶対見てなかったらできないよ。団子差しも。(略)こういうことどんどん教えたいから(略)子どもたちから『昔はこんなことやってたの?どうやんの?わらじってどう作るの?』って(昔の生活や知恵を)聞いてほしい。私たちやんなかったら、終わりだよ。気もむっというか、急いでやらないと……。 (略)できるうちに、どんどん若い人連れてきてほしい(Sさん)」

上記の語りから、農家民宿の受け入れや農業体験の指導を通じて、農業や昔の生活を伝えることに「生きがい」や「やりがい」を感じ、さらに自分の「ミッション」として捉えている。

さらに、SさんとIさんからは、農家民宿を行なう当事者として「やりがい」を次のように語る。

「自分は農業だけで終わりたくないなっていう気持ちがあったものだから、挑戦してます。(略)こういうこと(農家民宿や農家レストラン)やりはじまったら、心にうんと潤いっていうか、自分で好きなことできるから。うわあ、今日は充実した良い日だったなっていう日が大分あります。(Sさん)」

「忙しいんだけどそれがまた励みになる。達成感っていうのかな。別にお客さんをお迎えしたことによる達成感ではなくて、自分の毎日毎日の生活をお客様に認めていただいているというか……。 (Iさん)」

SさんとIさんは、農家民宿を受け入れることを自分自身の生き方を充実させるものとして、あるいは日々の平凡な暮らしを新たに意味付けることに繋がるものとして位置づけている。

⑤ 農家民宿は女性の収入に繋がる

農家民宿の「経済効果」については、①農家民宿の受け入れにより収入(Dさん、Gさん)として、さらに、②生産物の直接販売に結び付けることで収入に繋がっている(Kさん、Vさん)。

ここでは農家民宿による収入の経済的効果について、会社に勤めながら同居する母の協力を得て農業と農家民宿、農業体験を行なっているGさんの例を取り上げる。

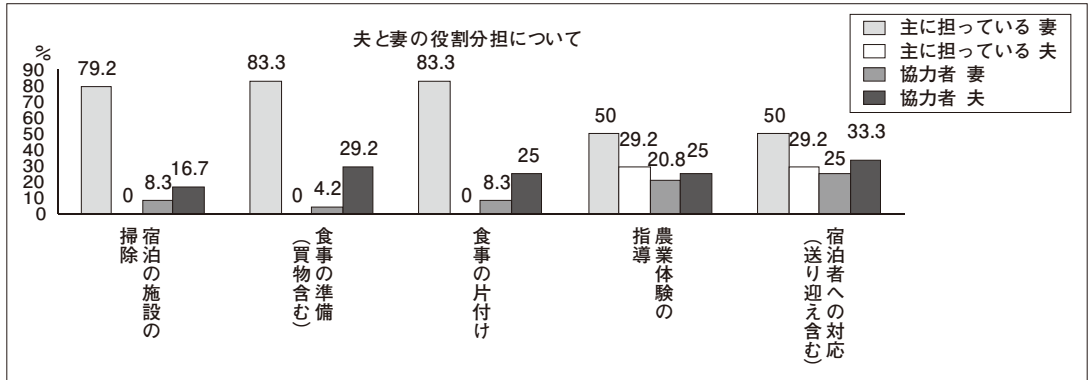
「専業農家でキュウリを作るとか、そういう作業は家族労働がないのでできない。でも、農泊、(農業)体験は、私とばあちゃんでもやれる、(男性がいなくても)無理なくできる。(Gさん)」

つまり、Gさんは、農家民宿や農業体験を女性の特性を生かした事業として、また、農業経営するときの現金収入源の1つとして位置づけている。Gさんは、農家民宿に「楽しみ」や「やりがい」を感じると同時に、女性だけでも無理なくできる農家民宿や農業体験を農業と並行させることによって、農業の経営基盤の強化に取り組んでいると言える。

さらに、<表11>で示したように、収入の位置づけは、「報酬」や「家計費」としての位置づけの他、「ボランティア」としても位置づけられている。したがって、農家民宿をとおして得た収入は経済的

表11 収入の位置づけ

収入の位置づけ	事 例
①女性の報酬	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「農業の新たな副収入だと思って。農家の奥さん、お小遣いなんてもらえないから(AHさん)」</li> <li>・「農泊での収入は報酬。私は最初から【自分の名前】でやっているから(Bさん)」</li> <li>・「(農泊の収入は)私名義で入る。嫁も手伝っているんで、その分は嫁にも渡す(Eさん)」</li> <li>・「ほしいものがあるときはそのお金を使って・・・自分のために。自由に、自分で働いたお金だからって、生きがいもある。(略)私は働いたことないから、給料ってないから。お父さんの給料は管理してきたけど(Pさん)」</li> <li>・「升入に入れて貯めておく。1年たったら、それに少し足して夫と2人で旅行に行く。(自分で働いた報酬なので)誰にも何も言われることないし、自分に対して(ご褒美)(Sさん)」</li> <li>・「自分で取ったお金だと遠慮なく使える。自分でコツコツ貯めたお金だと悠々使える(Qさん)」</li> <li>・「報酬は自分の報酬という意味合い。そんなにはならないけど(Uさん)」</li> </ul>
②家計費	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「そんなにいっぱい(農業で)取ってないから、(農泊も)生活費に入ってくる(Cさん)」</li> <li>・「(収入は最初に)私に入るかな。私らに入ったって同じだな、買物したり(するから)(Dさん)」</li> <li>・「農家民宿、楽しくて、収入があって最高ですね。農業の赤字をゼロにしたいですね(Gさん)」</li> <li>・「いくらも儲けてないから。家計に入ってしまう、食料買っているわけだから(Rさん)」</li> </ul>
③ボランティア	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「グリーン・ツーリズムは金儲けではなく、『人儲け』」「グリーン・ツーリズムとか農泊で儲けようとはしないよ。グリーン・ツーリズムはゆとり、遊びというか、息抜き(Fさん)」</li> <li>・「そんな収益どうのでもなく、ボランティア精神でやっているものなので(Hさん)」</li> <li>・「(酒代)飲んだ分取ってくださいって言われているけど、私たちそんな取る何もないしね。いいんじゃないって、結局取らないんだよね。(略)お金取らないで柿も持たせるの。なんでもかんでもお金にしたらって、心が通じないからね(Kさん)」</li> </ul>
④収入といえるほど受入れていない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「そんなに泊めていないので家計の足しにはならないですね(Lさん)」</li> </ul>



図表9 夫と妻の役割分担について

な意味のみならず、社会的意味を持つものとしてとらえている。

⑥ 「農家民宿」は、「女性」によって成り立つ事業である。

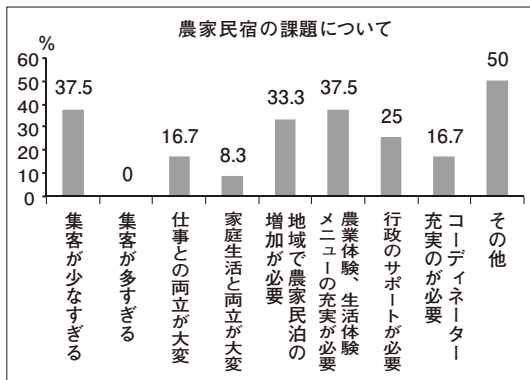
泊まり客を受け入れた場合、食事準備や食事の後片付け及び宿泊施設の掃除は主に女性が担当している。一方、農業体験の受け入れと宿泊者への対応には男性(夫)の参加が見られるものの、女性(妻)の参加が多くみられる。

<図表9>で示したように、送り迎えを含む宿泊に関するものはもちろん、農業体験の指導に至るまで「妻」、すなわち、女性が主に担当していることがわかる。したがって、農家民宿においては「女性」への期待が非常に高いことがわかる。

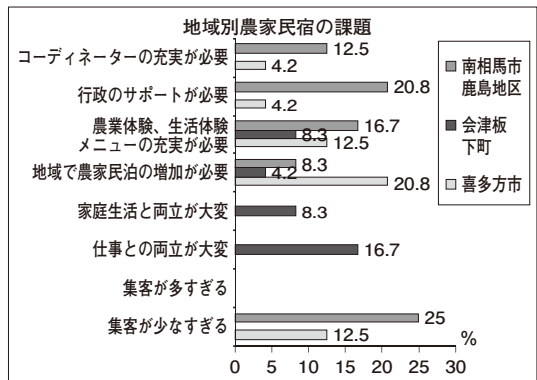
⑦ 農家民宿の課題への気づき

一方、農家民宿を行う際の課題について聞いたところ、「集客の少なさ」と「体験メニューの充実の必要性」を課題として意識している人が、約4割弱で最も多い。また、地域での農家民宿受け入れ農家を拡大していく必要性を指摘する人(33.3%)、行政のサポート(25%)やコーディネーターの充実(16.7%)といった人的サポートの必要性も課題として認識されている。

さらに、地域別の民宿の課題をみると、喜多方市では「地域で農家民宿の増加が必要」が、会津坂



図表10 農家民宿の課題について



図表11 地域別農家民宿の課題

表 12 農家民宿の課題をその理由

		農家民宿の課題についての意識
人的サポート	助言者	・行事食や郷土食を教えてくれる人がほしい。昔の「おばあさんの知恵袋」のような人がいると助かる。(Sさん)
	コーディネーター	・現在のところ、行政では熱心ではない。コーディネーター養成講座等の開催による育成が必要(Wさん)
	後継者	・農家民宿を担う人達が60代、70代と高齢化してきており、ご飯作りがネック。また、農業の担い手自体が高齢化してきている。(Cさん) ・グリーンツーリズムの後継者に地域の若い方も入ってきてほしい。(Pさん、Sさん)
	サポーター	・農業や農泊でも、ちょっと忙しいときに気軽に手伝いに来てくれる人、一緒にやれる仲間がほしい。私は一人で頑張っているが、夫にも手伝ってもらえたら。(Qさん)
受け入れの内容充実	体験メニュー	・地域で連携して、充実した農業体験を提供できるとよい。(Gさん)
		・雨の時のプログラムの充実が必要。ハウスがあるわけでもないのので何を作業させたらよいか悩む。(Dさん)
		・種まきから収穫まで一貫性のある体験をさせたい。(Sさん、Lさん)
		・都会の子だけでなく、地元の子どもたちにも農業の大切さを伝えたい。(Bさん、Sさん)
	研修	・地域内で農家民泊の視察や農業体験者同士での研修の機会があるとよい。(Gさん)
		・農家も受け入れのための勉強、研修をすることが大切。(Eさん、AHさん)
・研修をやりたいがその補助を行政に言っても通らない。研修は必要。(Sさん)		
情報発信	PR	・自分でも集客の努力が必要。その方法がよくわからない。また、グリーンツーリズムに関する市のホームページの内容充実とマメな更新が必要。(Cさん)
		・パンフレット、ブログ、名刺などは自分で作って独自に努力している。(Gさん)
		・行政は信頼度が高いのでPRの面で連携協力してほしい。後援になっているだけでも効果がある。(OHさん)

下町では「仕事との両立が大変」を、南相馬市鹿島地区では「行政のサポートが必要」が、それぞれの地域で最も必要な課題としてあげられている。一方、アンケートのその他の意見と聞き取りにより出された内容については、＜表12＞のとおりである。

さらに、聞き取り調査からは、第1に、人的サポートの必要性、第2に、受け入れの内容充実の必要性、第3に、情報発信の重要性を課題として意識している。まず、「人的サポートの必要性」については、①「助言者」、②コーディネーターの育成の必要性、③後継者の育成、④サポーターなどが挙げられる。特に人的サポートについては、農家民宿を實際行う際に必要な人手の不足と農家民宿運営全般にかけてのアドバイザーの必要性があげられている。

次に、「受け入れの内容充実の必要性」については、①体験メニューの充実の必要性と、②研修の必要性が取り上げられる。これらに関しては、実際にお客さんを受け入れるなかで生じる疑問や課題についてお互いに情報交換をとおして学びあう研修の機会を求めるとともに、地域内での農家民宿のレベルアップを図りたい希望を持っている。このことから農家民宿は地域のつながりを育みながら推進している事業であるといえる。

最後に、「情報発信」については、集客の少なさが課題として指摘されており、自ら名刺やブログ作成をとおしたPRを行っている人も見られたものの、あくまで少数数である。したがって、集客

につながる効果的で積極的な情報発信が求められている。

### 3-2 グリーン・ツーリズムと学びの可能性

以上、福島県のGTの推進と実際農家民宿を営んでいる当事者のインタビューをとおして、日本の農村文化や農村資源を生かした日本型GTが定着しつつあることが確認できた。近年、農家レストランや農家民宿、農業体験などへの取り組みが増えているなかで、2008年スタートした「子どもプロジェクト」は、GTの目的と重なる部分がある。すなわち、「子どもプロジェクト」では体験型学習や農家での民泊体験が求められていることである。したがって、今後、その受け皿となる農家の拡大に関するニーズが高まるとともに、それにともなう地域での受け入れ体制づくりが求められるであろう。こうしたGTの展開について、青木辰司(2008)は、「今までのGTが都市側の発想や外部資源によって事業展開しがちのツーリズムを農山漁村の対等な連携や交流として持続していくためには、主体性と互酬性、そして双方向性の確保が、不可欠である」と指摘するとともに、さらに、「日本独自型」GTの課題について、「①体験主義の浸透と画一化、②規制緩和と品質管理、③市場の未形成とわが村意識の強化、④行政支援のビジネス化」など4点を指摘する。一方、福島県におけるGT推進の背景には、行政主導によるスタートであったが、インタビュー調査からすると地域住民がGTに関わるうちに意識の変化が見られることが指摘できる。こうした意識の変化は自分自身への振り返りや住み慣れた地域に対する振り返りをとおして獲得しており、さらに、彼女らの振り返るまでのプロセスには、外部の人(訪れたゲスト)とのふれあいが大きなファクターとして作用している。こうした、振り返りには「学び」が潜んでおり、荒樋豊(2008)がすでに指摘した農村資源を介した都市と農村の交流をとおした相互学び合いがそこには存在している。こうした学び合いは、青木が指摘した担い手が主体性を持つことにつながるものとして理解されよう。前節で確認し、彼女らのGT活動への参加は「気づき」による「学びの可能性」を有しており、こうした視点を掘り下げることは農家民宿を担う女性たちの主体形成のあり方を確認することにつながり、さらには今後GT活性化につながる一つの要因として考えられる。

## 4 まとめ

本研究では、農家民宿のスタートから実際の受け入れの現状を取り上げ、農家民宿が持つ構造及び特質がそれを担っている女性にどうした影響をもたらしているかを「学び」に焦点を当て述べてきた。また、今後、農家民宿の拡大へのニーズに答えるためには、どういった条件が必要であるかを調査のデータを用いて確認してきた。

まず、農家民宿に関わることによる学びの可能性については以下のことが言える。

地域によって農家民宿に取り組まれている内容の違いや行政の関わりによって違いがあるものの、それを担っている女性が置かれている状況と意識については共通の部分がみられる。農家民宿の開始にあたって、行政の勧めで始める女性の割合が高いが、実際に開始してからは満足感が高く(9割以上が満足)、また、「農家民宿を行なった後の変化について」を見てみると、それぞれの項目

は肯定的に評価されている。具体的には、農業体験を受け入れ、青少年育成にかかわることによる生き甲斐ややりがい、また、都会住民の感想がもたらす食文化への再評価や景観への再認識といった農村住民の意識の変化、さらに農村問題に気づき、自ら発信することで都市と農村の共生関係を構築していく可能性などが農家民宿受け入れの効果として指摘できる。そして、その根底には人と人の交流、特に心の交流があり、GTは、単なる都市・農村交流事業という経済的側面だけでなく、都市住民と農村住民の相互の学び場として捉えることができよう。

そこで、本研究では学びの可能性が含まれていることを確認できたが、GT参加者メンバーが同じ地域で活動を行ったとしても、それぞれ語り合う言葉が異なっていることにより、GT活動に関して様々な意味づけをしていることが今回の調査から明らかであった。したがって、それぞれの語り手が持っている資源を考慮した、つまり、社会的・文化的なアプローチをとoshi、総合的に学びを探ることが必要であり、そうすることによってGTにおける学びの構造が見えてくるであろう。

最後に、農家民宿拡大へつながる条件については以下の課題が存在している。まず、農家民宿は女性の存在抜きではできない事業であり、その意味で農家民宿は、女性の特性を活かした多角的事業と言えるだろう。しかし一方で、農業と家事に加え、農家民宿・農業体験を担うことに対する女性の負担が大きいことがわかる。次に、地域経営型GTの観点から、さらに、今後の「子どもプロジェクト」推進の取り組みからも、地域内の様々な団体からなる協議会形式でGT推進の取り組みが進むなか、ネットワークの構築はGTの拡大につながるものとして欠かせない。こうした状況を念頭においた福島型GTモデルが求められているといえる。

以上、取り上げた課題を念頭におきながら、GTにおける学びの構造を明らかにするために農家民宿に関わる当事者のみならず、当事者が持っているネットワークにも視野を広げた研究を進めていきたい。

## 【参考文献】

- ・愛知和男・盛山正仁編著、2008、『エコツーリズム推進法の解説』(株)ぎょうせい
- ・青木辰司、2004、『GTの実践の社会学』丸善株式会社
- ・———、2008、「グリーン・ツーリズム—実践科学的アプローチをめざして」『グリーン・ツーリズムの新展開』、村落社会研究43、農産漁村文化協会
- ・秋津元輝・藤井和佐・渋谷美紀・大石和男・柏尾珠紀、2007、『農村ジェンダー—女性と地域への新しいまなざし』昭和堂
- ・天野寛子・粕谷美砂子、2008、『男女共同参画時代の女性農業者と家族』、ドメス出版
- ・天野寛子、2001、『戦後日本の女性農業者の地位—男女平等の生活文化の創造へ』、ドメス社
- ・荒樋豊、2008、「日本農村におけるグリーン・ツーリズムの展開」『グリーン・ツーリズムの新展開』、村落社会研究43、農産漁村文化協会
- ・稲本志良・桂瑛一・河合明宣編著、2006、『アグリビジネスと農業・農村』、(財)放送大学教育振興会
- ・井上和衛・中村攻・宮崎猛・山崎光博、1999、『地域経営型GT』都市文化社
- ・井上和衛、2002、『ライフスタイルの変化をGT』、岩波書房

- ・———、2004、『都市農村交流ビジネス－現状と課題』、岩波書房
- ・岩崎由美子、1995、「農村における女性起業の意義と方向性－農村の女性起業実態調査を通じて」『家族農業経営における女性の自立』村落社会研究31、農山漁村文化協会
- ・岩崎由美子編著、2005、『女性の参画と農業・農村の活性化－女性農業者の声を地域につなぐ－』全国農業会議所
- ・多方一成・田淵幸親・成沢広幸、2000、『GTの潮流』、東海大学出版会
- ・鶴理恵子、2007、『農家女性の社会学』コモンズ
- ・宮崎猛編、2006、『日本とアジアの農業・農村とGT』、昭和堂
- ・山崎光博・小山善彦・大島順子、1993、『グリーン・ツーリズム』(社)家の光協会
- ・財団法人都市農山漁村交流活性化機構、2007、『感動の田舎泊 田舎で見つけた感動体験』財団法人都市農山漁村交流活性化機構
- ・———、2008、『農林漁家民宿における子どもの長期宿泊体験活動受入対応の手引き』財団法人都市農山漁村交流活性化機構
- ・長期宿泊活動研究会、2008、『学校教育における『長期宿泊活動』の手引き体験を通して学ぶ教科学習のすすめ』独立行政法人国立青少年教育振興機構
- ・農林水産省農村振興局、2008、『農山漁村における宿泊体験活動の受け入れのための手引き～子ども農山漁村交流プロジェクトの推進に向けて～』農林水産省農村振興局
- ・福島県観光交流局観光交流課、2008、『農家民宿開設のてびき』
- ・農政ジャーナリストの会編、2006、『女性が変わる農業・農村』、農林統計協会

## 【註】

- 1 本研究は、福島県男女共生センター地域課題調査研究の委託を受けて行った調査のデータを用いて分析している。
- 2 GTが日本の政策課題として初めて登場したのは1992年公表の「新しい食料・農業・農村政策」においてである。その背景として、今日のWTO体制を想定しながら国際競争に耐えうる農業経営の体質強化を図ると同時に、農村地域、とりわけ中山間村地域等の条件不利地域における多面的な地域資源を活用したあらたな産業おこしや就業機会の創出の必要性が重要な課題として認識され、そのような中、GTは農村経済の再生・再構築につながる農村政策の重要な柱として取り上げられた。
- 3 農林漁業体験民宿の登録は(財)都市農山漁村交流活性化機構(「まちむら機構」)が行なっている。2007年12月現在、全国約540軒(福島県で29軒)登録されている。
- 4 農林水産省ホームページより(<http://www.maff.go.jp>)。
- 5 小椋唯一は、修学旅行＝観光という概念から抜けだし、「修学旅行を『生きる力』を育むためや学校では実現不可能な体験学習のためのセカンドスクールで、地域の人々と交流し教科や授業の延長にあるもの、と捉えれば新たな展開が生まれる」と指摘する(2007、pp 118)。この変化は、喜多方市GT推進室職員への聞き取りからも伺える。平成10、11年ごろから教育旅行のメニューの内容が変化し、農業体験をメニューに入れることを希望する学校が増えてきたようだ。
- 6 国の造成事業に取り組んだ地区。その後、減反政策によって米に換ってそばの栽培が行なわれた。新たな収入源のひとつとしてそばを利用したGTに着目、行政主導で行なってきた。

## グリーン・ツーリズムの推進と学びの可能性

- 7 サポートセンターは、農業体験と農家民宿の受け入れ窓口の機能及びコーディネーターの機能を果たしており、会員からは体験・宿泊料の10%が「預かり金」としてセンターに支払われる。さらに、活動内容をみると、①総合窓口(相談、予約受付、手配等)に関する業務、②PR・情報発信(ホームページ設置運営、顧客管理、営業活動等)に関する業務、③地域の特性を活かした多様なプログラム企画・開発支援に関する業務、④実践団体の運営支援に関する業務、⑤会員間の交流に関する業務、⑥関係機関との連絡調整に関する業務、⑦その他、センターの目的を達成するために必要な業務を行なっている。
- 8 8つの団体とは、①熊倉農業体験塾、②おぐにの郷、③岩月豊友会、④けいとく・熊野の郷、⑤山都地区GT推進協議会、⑥高郷GT推進協議会、⑦駒形ユングフラウ、⑧上三宮稲穂会)などである。
- 9 全国で53地域、福島県では喜多方市と南会津町が体制整備型受入モデル地域として選定された。
- 10 南相馬市鹿島区のGTの推進の経過は、旧鹿島町「地域振興グループ」のGT担当特命職員、都市農村交流研究会メンバーへの聞き取り調査より作成。
- 11 この部署は合併により現在存在していない。
- 12 例えば、喜多方市の場合は教育旅行及び農業体験に主力、会津坂下町の場合は農家民宿の組織化を目指した「連携支援型」を推進、南相馬市鹿島区では、地域の特徴を生かした漁業協同組合との連携をとおしたブルー・ツーリズムへの取り組みが行われている。



# The Promotion of Green Tourism and its Potential for Learning

## Examples of Farm Inn in Three Regions of Fukushima Prefecture

Hyunsuk PARK

(Education and Research Supporter, Graduate School of Education, Tohoku University)

Eiko TAKAHASHI

(Member, International Women's Education Association)

The concept of green tourism was first raised in 1992 and was initially promoted by the central government, but today regionally-operated green tourism is becoming more widespread owing to the efforts of agricultural regions. Expectations are particularly high for women and the elderly with regards to the promotion of green tourism, and there are hopes that it will lead to the creation of new jobs for these people. The promotion of green tourism is particularly diversified from the point of view of farmhouse restaurants, farm inn, the sale of agricultural produce and similar concerns, and much attention is currently being paid to the prevalent increase in direct sales, which is expected to result in increased activity in the agricultural areas that establish systems incorporating the characteristics of female workers.

Fukushima Prefecture (Kitakata City) was the first region of Japan to declare itself a Green Tourism Town (March 2003,) and in addition to this it was selected as a Model Region for the Mountain,“Fisheries and Village Exchange Project for Children” in 2008. Activities such as this are leading to a conspicuous increase in the number of women participating in regional issues. The Mountain,“Fisheries and Village Exchange Project for Children” was inaugurated last year, and it involves hands-on experience while staying in farmhouses and fishermen's homes. Farmhouses and fishermen's homes providing accommodation as guesthouses is attracting more and more attention, and it is no exaggeration to say that an increase in the number of homes willing to accept visitors will be a topic of conversation in the future.

In addition to clarifying local conditions in Farm Inn based on interviews and surveys targeting farmers and carried out in three areas of Fukushima Prefecture in which such guest houses actually exist (Kitakata City, Aizu-Bange Town and Minami-Soma City Kashimaku,) this paper also examines the conditions required to expand the number of farm inn in operation.

Keyword : Green Tourism, Farm Inn, Potential for Learning, Fukushima Prefecture

